

# CENTER FOR TOURISM RESEARCH

## 2020年度 年次報告書



和歌山大学

国際観光学研究センター

# Contents 1

	国際観光学研究センター(CTR)について……………	2
1.1.	ミッション……………	2
1.2.	ビジョン……………	2
1.3.	研究推進におけるキーワード……………	2
1.4.	目標……………	2
1.5.	Tourism & SDGs……………	2
1.6.	運営体制……………	3
1.6.1.	組織図……………	3
1.6.2.	意思決定機関……………	3
1.6.3.	CTR研究員……………	4
1.6.4.	CTR研究ユニット……………	9
1.7.	活動内容……………	10
1.7.1.	研究活動……………	10
1.7.2.	研究・教育サポート……………	10
1.7.3.	広報、アウトリーチ、アドボカシー……………	11
2	活動報告……………	12
2.1.	研究活動……………	12
2.1.1.	主な出版業績一覧……………	12
2.1.2.	登録研究プロジェクト一覧……………	35
2.1.3.	産官学連携プロジェクト……………	37
2.1.4.	「2020年度CTR研究集会」開催……………	38
2.1.5.	論文集出版……………	38
2.1.6.	研究コラム掲載開始……………	39
2.1.7.	オンラインプログラムの国内外動向調査……………	39
2.2.	研究・教育サポート……………	39
2.2.1.	研究情報交換会「CTR Student Coffee Chat」開催……………	39
2.2.2.	イベント開催支援……………	40
2.2.3.	観光学部授業科目の開講支援……………	40
2.2.4.	外部機関連携活動の支援……………	41
2.2.5.	学内FD・SD活動支援……………	41
2.3.	広報、アウトリーチ、アドボカシー……………	42
2.3.1.	セミナー集録発行……………	42
2.3.2.	ニュースレター発行……………	42
2.3.3.	LinkedIn公式ページ開設……………	42
2.3.4.	CTR紹介動画制作……………	43
2.3.5.	外部機関との連携促進……………	43
2.3.6.	メディア出演……………	44
2.3.7.	学会、イベント参加……………	45
2.3.8.	学会スポンサー参加……………	45
2.3.9.	学会・イベント開催協力……………	46
2.3.10.	セミナー等の企画・運営……………	47

# 1 国際観光学研究センター(CTR)について

## 1.1. ミッション

観光学研究の高度化を通じて、健全で持続可能な社会の発展に寄与する。

## 1.2. ビジョン

倫理と責任ある観光発展に重きを置く、アジア太平洋地域を牽引する研究機関を確立する。

## 1.3. 研究推進におけるキーワード

- Ethics and Responsibility
- Diversity and Equity
- Community and Environment

## 1.4. 目標

- 国内外の観光におけるステークホルダーとの連携強化
- サステナビリティを支援する研究活動を通じた、倫理的かつ責任ある観光活動の促進
- 学内外における活発な研究文化の醸成
- 観光教育の支援

## 1.5. Tourism & SDGs

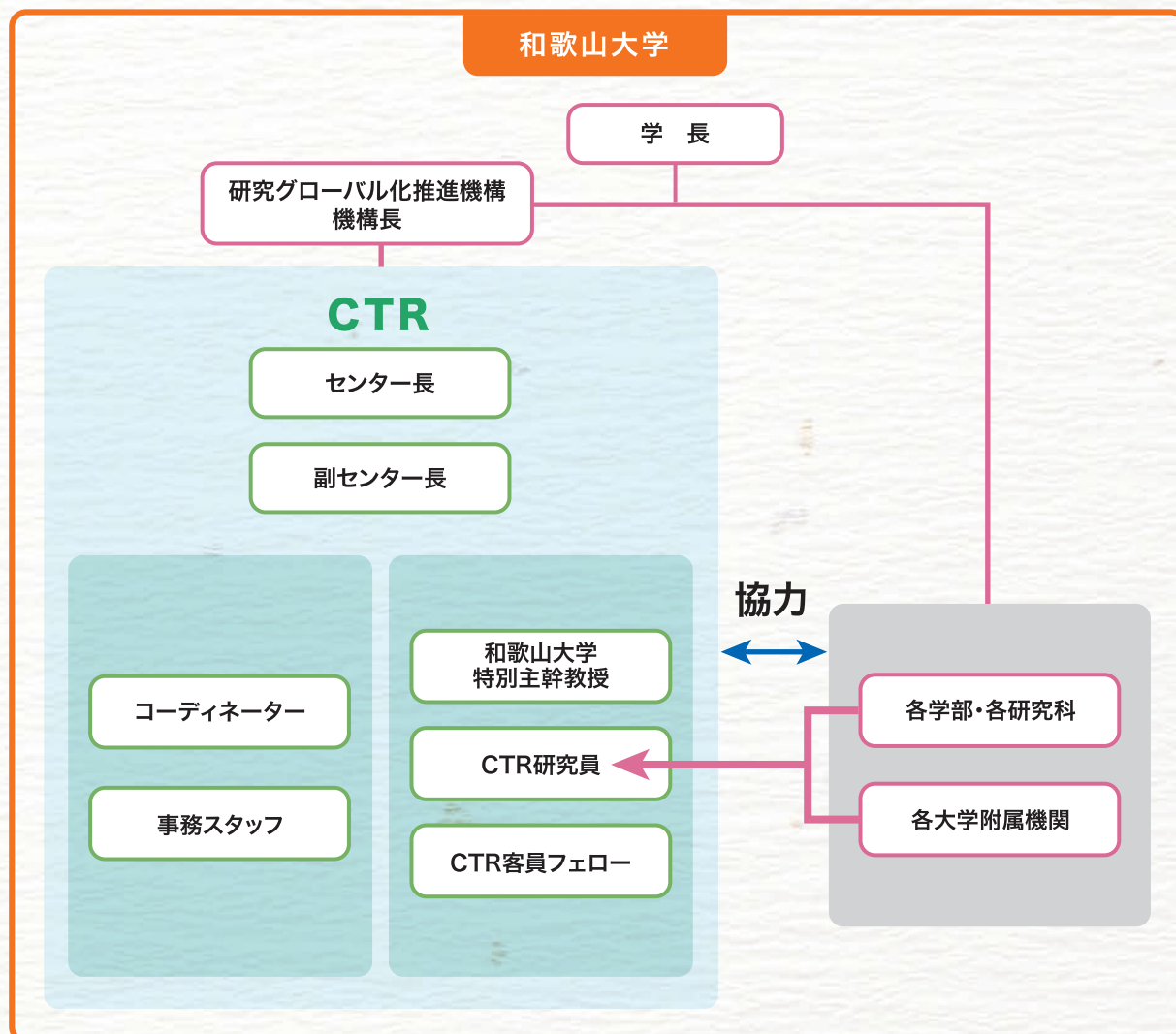
国連の掲げる「持続可能な開発目標(SDGs)」の達成に観光を通じて貢献していく。

## 1.6. 運営体制

### 1.6.1. 組織図

国際観光学研究センター(CTR)機構

2021年3月現在



### 1.6.2. 意思決定機関

グローバル化推進会議	全学のグローバル化推進を踏まえた戦略・企画の立案・管理。
運営委員会	日常的な意思決定及び、事業計画管理・評価。

### 1.6.3. CTR研究員

CTR研究員 (計39名)	和歌山大学特別主幹教授	3名
	CTR専任研究員	2名
	CTR併任研究員	観光学部25名、学内他学部等9名
CTR客員フェロー (計39名)	CTR名誉フェロー	2名
	CTR客員フェロー	34名
	CTR客員ジュニアフェロー	3名

## 研究員一覧

### 1.6.3.1. CTR研究員

(2021年3月現在)

#### <和歌山大学特別主幹教授>

MILLER, Graham	和歌山大学 特別主幹教授、国際観光学研究センター 副センター長、Professor, University of Surrey (UK)
RITCHIE, Brent W.	和歌山大学 特別主幹教授、Professor, The University of Queensland (Australia)
SHARPLEY, Richard	和歌山大学 特別主幹教授、国際観光学研究センター 副センター長、Professor, University of Central Lancashire (UK)

#### <CTR専任研究員>

CHEER, Joseph M.	国際観光学研究センター 特任教授
PROGANÓ, Ricardo Nicolás	国際観光学研究センター 特任講師

## <CTR併任研究員>

CHAKRABORTY, Abhik	観光学部 講師
DOERING, Adam	観光学部 准教授
秋山 演亮	クロスカル教育機構(教養・協働教育部門) 教授
足立 基浩	経済学部 教授
井伊 博行	システム工学部 教授
伊藤 央二	国際観光学研究センター 副センター長(センター長代理)、観光学部 准教授
大井 達雄	観光学部 教授
大浦 由美	観光学部 教授
大橋 直義	教育学部 准教授
尾久土 正己	観光学部 教授
小野 健吉	観光学部 教授
加藤 久美	観光学部 教授
木川 剛志	観光学部 教授
岸上 光克	食農総合研究教育センター 教授
北村 元成	観光学部 教授
佐々木 壮太郎	観光学部 教授
佐野 楓	観光学部 准教授
澤田 知樹	観光学部 准教授
竹田 明弘	観光学部 准教授
竹林 明	観光学部 教授
竹林 浩志	観光学部 准教授
辻本 勝久	経済学部 教授

出口 竜也	観光学部 教授
富田 晃彦	教育学研究科 教授
永井 隼人	観光学部 講師
永瀬 節治	観光学部 准教授
東 悦子	観光学部 教授
彦次 佳	教育学部 准教授
藤井 至	観光学部 観光実践教育サポートオフィス 特任助教
藤田 武弘	観光学部 教授、食農総合研究教育センター センター長
堀田 祐三子	観光学部 教授
八島 雄士	観光学部 教授
吉田 道代	観光学部 教授
吉野 孝	システム工学部 教授

### 1.6.3.2. CTR客員フェロー

#### <CTR名誉フェロー>

敬称略(2020年10月現在)

特別主幹研究員は、観光学の発展・確立に向けた包括性・普遍性の高い研究課題を有し、その裏付けとなる優れた研究実績を有する研究員をいう。

大橋 昭一	和歌山大学 名誉教授
山田 良治	和歌山大学 名誉教授

## <CTR客員フェロー>

CTR客員フェローは、国内外の大学教員または一定の研究経験を有するものとし、CTR研究員との共同研究を行うもの、CTRでの研究プロジェクトへ参加するものとする。

ALIPERTI, Giuseppe	Assistant Professor, Tourism Department, University of Deusto (Spain)
CHIEN, Pi-Hsuan Monica	Senior Lecturer, UQ Business School, The University of Queensland (Australia)
THAM, Aaron	Lecturer, Tourism, Leisure and Events Management, University of the Sunshine Coast (Australia)
今井 ひろこ	コムサポートオフィス 代表
上原 史子	岩手県立大学 講師
小形 正嗣	関西テレビ放送株式会社
小川 勝久	キヤノン株式会社 デバイス開発本部 主席
小野 綾子	女子美術大学 助手(助教)
柏木 翔	神奈川大学 国際日本学部国際文化交流学科 助教
神田 孝治	立命館大学 文学部 教授
金 宰煜	広島大学大学院 社会科学研究科マネジメント専攻 講師
権 純珍	倉敷芸術科学大学 危機管理学部 教授
黒田 有彩	株式会社アンタレス 代表取締役
間中 光	追手門学院大学 地域創造学部 講師
河野 慎太郎	Assistant Professor, Faculty of Kinesiology, Sport, and Recreation, University of Alberta (Canada)
小柴 恵一	東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 イノベーション推進室 A&V企画担当部長
斎藤 望	富山福祉短期大学 国際観光学科 准教授
齊藤 広晃	立命館アジア太平洋大学 国際経営学部 准教授
佐野 宏樹	立命館大学 経営学 准教授
杉山 幹夫	株式会社サン広告社 シニアプロデューサー



蘇 哲仁	Full Professor, Department of Restaurant, Hotel and Institutional Management, Fu Jen Catholic University (Taiwan)
田中 光敏	大阪芸術大学 映像学科 教授、映画監督、CMディレクター、クリエイターズユニオン 代表取締役
陳 意玲	国立屏東大学 休閒事業経営学系 助理教授 (Taiwan)
永田 修一	関西学院大学 商学部 准教授
長野 史尚	九州医療スポーツ専門学校 教育職員
中村 仁	跡見学園女子大学 観光コミュニティ学部 准教授
堀込 孝二	大阪国際大学 人間科学部 スポーツ行動学科 講師、特定非営利活動法人スポーツファンデーション 代表理事
牧野 恵美	広島大学 産学・地域連携推進部 アントレプレナー教育部門長、准教授
宮口 直人	株式会社ビズユナイテッド 代表取締役
森 清頭	清水寺 執事補
山口 志郎	流通科学大学 人間社会学部 准教授
吉住 千亜紀	飯田市美術博物館
吉田 潔	M&R 地域マーケティング研究所 代表取締役
李 只香	九州共立大学 経済学部 教授

### <CTR客員ジュニアフェロー>

CTR客員ジュニアフェローは、原則として、国内外の大学院修士課程及び博士課程在籍中の学生もしくは、修士課程修了後、CTR研究員との共同研究やCTRでの研究プロジェクトへ参加するものとする。修士課程及び博士課程在籍中の学生については、在籍大学の指導教員の許可を受ける必要がある。なお、当該研究により単位を付与することはない。

明山 文代	和歌山大学 観光学研究科 修士課程修了、元中学校教員
江 子熹	香港理工大学 School of Hotel and Tourism Management 博士課程 (Hong Kong)
曹 禎敏	和歌山大学 観光学研究科 博士後期課程単位取得退学

## 1.6.4. CTR研究ユニット

開所以来、CTRでは10の研究ユニットを組織し研究活動を推進していたが、2020年4月に組織再編に伴い、3つの研究ユニットに改編した。今後も共同研究や研究会等の活動は「経営 / Management」「地域 / Community」「文化・遺産 / Culture & Heritage」の各ユニットを軸に行っていく。なお、CTR研究員（客員フェローを除く）はいずれかのユニットに所属し、研究プロジェクトは複数のユニットにまたがることもある。



### 経営 / Management

概要	観光・ホスピタリティ産業及び観光地の経営戦略、マーケティング、リスクマネジメント、イノベーションを主な研究分野とする。研究活動を通じて政策立案及び戦略の策定に貢献し、観光地及び観光・ホスピタリティ産業の持続可能な競争優位の構築を目指す。
リーダー	Brent W. Ritchie
メンバー	Giuseppe Aliperti, Pi-Hsuan Monica Chien, Aaron Tham、足立基浩、上原 史子、大井 達雄、柏木 翔、金 宰煜、権 純珍、間中 光、江子熹、齊藤 広晃、佐々木 壮太郎、佐野 楓、杉山 幹夫、蘇 哲仁、竹田明弘、竹林 明、竹林 浩志、陳 意玲、辻本 勝久、出口 竜也、永井 隼人、長野 史尚、中村 仁、堀込 孝二、牧野 恵美、宮口 直人、八島 雄二、吉田 潔、李 只香

### 地域 / Community

概要	地域貢献型地方国立大学である和歌山大学にとって、地域社会は切り離せない観光研究の場である。地域社会や地域経済との関わりという観点から観光現象を把握し、「まちづくり」や「地域活性化」といったアプローチで観光開発に関する調査・研究を行う。
リーダー	Graham Miller
メンバー	Abhik Chakraborty, Joseph M. Cheer, Adam Doering, 秋山 演亮、井伊 博行、伊藤 央二、大浦 由美、小形 正嗣、小川 勝久、尾久土 正己、小野 綾子、岸上 光克、黒田 有彩、河野 慎太郎、小柴 恵一、斎藤望、澤田 知樹、永瀬 節治、藤井 至、藤田 武弘、堀田 祐三子、山口 志郎、吉住 千亜紀、吉野 孝

## 文化・遺産 / Culture & Heritage

概要	観光現象を文化論的な観点から探求していく他、文化遺産のマネジメントや保全及び開発に関する広い課題について、クリエイティブツーリズムなどの新しいアプローチも取り入れる。歴史的地域、建造環境や都市、農村や農業景観、自然環境、特徴ある文化が存続する地域及び無形遺産の保全や再生なども課題とする。
リーダー	Richard Sharpley
メンバー	Nicolás Ricardo Proganò、大橋 直義、小野 健吉、加藤 久美、神田 孝治、木川 剛志、北村 元成、田中 光敏、富田 晃彦、東 悦子、彦次 佳、森清顕、吉田 道代

## 1.7. 活動内容

### 1.7.1. 研究活動

#### ●登録研究プロジェクト:20件

- ◆科学研究費助成事業採択研究課題:17件
- ◆CTR研究員向け研究支援プロジェクト:3件

#### ●「CTR研究集会」開催

#### ●論文集出版

- ◆「Tourism development in Japan – Themes, issues and challenges」出版
- ◆「Wakayama Tourism Review」発刊

#### ●研究コラム掲載開始

#### ●オンラインプログラムの国内外動向調査

### 1.7.2. 研究・教育サポート

#### ●研究プロジェクト助成

- ◆CTR研究員向け研究支援プロジェクト:3件

#### ●研究環境整備

- ◆主要図書(電子ジャーナル含む)整備
- ◆研究成果公開促進インセンティブ制度
- ◆研究関連情報提供

- 研究情報交換会「CTR Student Coffee Chat」開催
- イベント開催支援
  - ◆「観光と宇宙5」
  - ◆「第3回日本国際観光映像祭」
- 観光学部授業科目の開講支援
  - ◆特別主幹教授・CTR専任研究員による授業科目開講支援
- 外部機関との連携活動支援
  - ◆International Committee of Tourism Film Festivals (CIFFT)加盟
- 学内FD(Faculty Development)・SD(Staff Development)活動支援
- 学内国際化推進業務支援

### 1.7.3. 広報、アウトリーチ、アドボカシー

- セミナー集録発行
  - ◆観光教育研究セミナーシリーズ「スポーツツーリズム～メガイベントが日本社会を変える～」報告書
  - ◆「Wakayama-CTR Webinar Series 2020」報告書
- ニュースレター発行
- LinkedIn公式ページ開設
- CTR紹介動画制作
- 外部機関との連携促進
  - ◆「Wakayama-CTR Webinar Series 2020」開催
  - ◆観光庁主催「UNWTO活用検討会」参加
  - ◆UNWTO Academy「Digital Resources」への情報提供
  - ◆「AM Virtual Corner in The 42th UNWTO Affiliate Members Plenary Session」出展
- メディア出演
- 学会・イベント参加(研究発表、招待講演、モデレーター、オブザーバー等)
- 学会スポンサー参加
  - ◆「CAUTHE 2021」
- 学会・イベント開催協力
  - ◆「AY2020 Joint Student Symposium on Tourism, Hospitality and Leisure Research」後援
  - ◆「SEAMA 2021: Island Tourism & Hospitality Management」後援
- セミナー等の企画運営
  - ◆観光教育研究セミナー：1回
  - ◆CTR Webinar Series：4回
  - ◆シンポジウム、イベント：2回

## 2 活動報告


### 2.1. 研究活動


#### 2.1.1. 主な出版業績一覧

研究ユニットごとの主な出版業績は以下の通り。なお、現学内研究員の業績詳細は、本学ウェブサイト内、研究者総覧ページ

(<https://researchers.center.wakayama-u.ac.jp/search?m=home&l=ja>)参照。


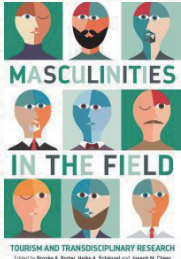
#### 経営ユニット ＜研究論文＞

出版年月	タイトル[ ]内はジャーナル名 ※はScopus収録ジャーナル、( )内はScopus CiteScore 2019
	著者※はCTR研究員
要旨[ ]内はキーワード	
2020年8月 	Residents' attitudes towards peer-to-peer accommodations in Japan: Exploring hidden influences from intergroup biases [Tourism Planning & Development] ※ (2.7) Takahiro Ikeji, Tourism Policy Department, Japan Travel Bureau Foundation ※Hayato Nagai, Faculty of Tourism, Wakayama University
<p>Peer-to-peer (P2P) accommodations have often received severe criticism from residents. Although studies have reported that residents often determine their attitude towards tourism by comparing its perceived positive and negative impacts, how these perceived impacts are formed has not been well investigated. Using Kyoto – a popular tourism destination in Japan – as a study context, this research aimed to address this gap by exploring how attitudes are subject to hidden influences, such as xenophobia and social tolerance. In line with past studies, this study found that there were significant relationships between perceived positive and negative impacts and support for P2P accommodations. Findings revealed that perceived positive impacts are significantly influenced by social tolerance and trust in local government, while perceived negative impacts are significantly influence by xenophobia. The results suggested that bias against foreigners has an impact on perceptions of the various effects of P2P accommodations.</p> <p>[P2P accommodations; Residents' attitudes; Intergroup biases; Xenophobia; Social tolerance]</p>	

出版年月	タイトル[ ]内はジャーナル名 ※はScopus収録ジャーナル、( )内はScopus CiteScore 2019
	著者※はCTR研究員
要旨[ ]内はキーワード	
2020年10月	In search of food in a foreign destination: The dining choice behaviors of young Australian tourists in Japan [Tourism, Culture & Communication] ※ (0.6)
	Toyohiko Sugimoto, College of Engineering, Shibaura Institute of Technology ※Hayato Nagai, Faculty of Tourism, Wakayama University
<p>Dining experience is a crucial element in international tourism because it can encourage tourists to understand local culture and has the potential to increase repeat visitation. A better understanding of tourists' dining choice behaviors is important for destination development; however, the literature has not yet fully investigated this topic, and in particular it is unclear how their behaviors change across repeat visits. This study aimed to fill these gaps by conducting semistructured in-depth interviews with young Australian tourists traveling to Japan. The analysis of the qualitative data identified four major dining choice patterns: perusing the area, searching online sources, hearing from friends or family members, and calling on previous experience. Within the four patterns, perusing the area (i.e., walking around a food district) was the most observed behavior for both first-time and repeat tourists. In addition, repeat tourists tended to choose more local and authentic food due to their motivational development from new-and-touristy to local-and-authentic dining experiences. This study's findings extend the current understanding of tourists' dining choices in the tourism literature and offer suggestions for practitioners.</p> <p>[Dining choice behavior; Young Australian tourists; Japanese food; First-time tourist; Repeat tourist]</p>	

出版年月	タイトル[ ]内はジャーナル名 ※はScopus収録ジャーナル、( )内はScopus CiteScore 2019
	著者※はCTR研究員
要旨[ ]内はキーワード	
2021年1月	Mobility patterns of international tourists: Implications for responsible urban tourism [Journal of Responsible Tourism Management]
	※Kaede Sano, Faculty of Tourism, Wakayama University, Japan ※Shuichi Nagata, School of Business Administration, Kwansai Gakuin University, Japan ※Hiroki Sano, College of Business Administration, Ritsumeikan University, Japan ※Joseph M. Cheer, Center for Tourism Research, Wakayama University, Japan
<p>Up until the height of the COVID-19 pandemic, the rapid growth of tourism in popular urban destinations around the globe saw the effects of chronic overcrowding and the breaching of acceptable limits of change imposed on local communities. Overtourism became prominent, intensifying amplified calls for planning and development regimes that emphasize responsible and sustainable tourism growth. In Japan, the term “tourism pollution” emerged as a response to untrammelled growth in cities like Kyoto, Tokyo and Osaka. Understanding the mobility of international tourists in urban contexts is raised here as one way to come to terms with urban overcrowding, particularly in hotspots where popular attractions predominate. In examining international tourist mobility, we argue that spatial and temporal behaviors can be constructive toward the responsible planning and development of urban tourism. Japan’s second most populated city Osaka is the context for this research with GPS big data collected in partnership with one of the country’s foremost navigation app developers. American, Chinese, and South Korean tourist mobility patterns were observed with the evidence pointing out that overcrowding evident at iconic attractions was largely influenced by public transport networks in the city. Evidently, there were distinct differences between the three groups of tourists highlighting that spatio-temporal behavior varied according to the tourist’s country of origin. The findings from this research are instructive to urban tourism stakeholders including policy makers, destination marketing organizations (DMOs), and public transport providers and can help inform responsible and sustainable urban tourism planning and development.</p> <p>[Urban tourism; Overtourism; Tourist mobilities; Tourism planning; Responsible tourism; Tourism pollution]</p>	


地域ユニット  
〈著書〉

出版年月	タイトル[ ]内は出版社名 著者／編者※はCTR研究員
2020年6月 	スポーツツーリズム入門 [晃洋書房]  ジェームス・ハイアム(ニュージーランド, オタゴ大学観光学部) 著 ※トム・ヒンチ(カナダ, アルバータ大学運動・スポーツ・レクリエーション学部) 著 ※伊藤 央二(和歌山大学観光学部) 訳 ※山口 志郎(流通科学大学人間社会学部) 訳
(目次) 日本語版への序文 訳者はじめに Chapter 1 スポーツツーリズムのこれまで Chapter 2 スポーツツーリズム研究 Chapter 3 スポーツツーリズム市場 Chapter 4 発展プロセスと課題 Chapter 5 空間:場所と旅行の流れ Chapter 6 場所, スポーツ, 文化 Chapter 7 環境:景観, 資源, 影響 Chapter 8 スポーツと観光経験 Chapter 9 季節性, スポーツ, 観光 Chapter 10 スポーツツーリズムの発展の傾向 Chapter 11 目標の動向と変化:絶え間なく発展するスポーツツーリズム領域	
2021年2月 	Masculinities in the field: Tourism and transdisciplinary research [Channel View Publications]  Brooke A. Porter, Umbra Institute, Perugia, Italy Heike A. Schänzel, International Tourism Management, Auckland University of Technology, New Zealand ※Joseph M. Cheer, Center for Tourism Research, Wakayama University, Japan
<p>This volume is an essential reference for designing, analysing and reflecting on field research. It advances the literature on gender by taking a specific focus on masculinities. The book is organised into four sections: hegemonic and heteronormative masculinities, performing heteronormative masculinities, situated masculinities and paternal masculinities. The chapters explore the question of what it means to be a 'man' and definitions of masculinities. These reflexive accounts of gendered field experiences further the call for gender positionality in research and will aid tourism researchers and other transdisciplinary scholars. It is a useful tool for supervisors, ethics committee members and researchers (male and female).</p>	

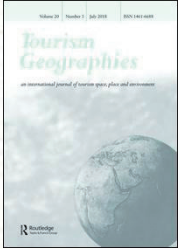


出版年月	タイトル[ ]内は出版社名 著者／編者※はCTR研究員
2021年3月 	Travel and tourism in the age of overtourism [Routledge]  Claudio Milano, Adjunct Professor at the Department of Social and Cultural Anthropology at the Autonomous University of Barcelona / Director of IDITUR Tourism Research Dissemination and Innovation Centre at Ostelea Tourism Management School, University of Lleida, Spain Marina Novelli, Professor of Tourism and International Development at the University of Brighton. UK ※Joseph M. Cheer, Professor at the Center for Tourism Research, Wakayama University, Japan / Adjunct Research Fellow, Faculty of Arts, Monash University, Australia
Introduction Chapter 1 Urban Tourism as a Source of Contention and Social Mobilisations: A Critical Review Chapter 2 Overtourism and Resident Resistance in Budapest Chapter 3 Overtourism Dystopias and Socialist Utopias: Towards an Urban Armature for Dubrovnik Chapter 4 Non-Institutionalized Forms of Tourism Accommodation and Overtourism Impacts on the Landscape: The Case of Santorini, Greece Chapter 5 Beauty and the Beast: A Fairy Tale of Tourismphobia Chapter 6 Overcrowding, Overtourism and Local Level Disturbance: How Much Can Munich Handle?	

<研究論文>

出版年月	タイトル[ ]内はジャーナル/著書名、出版社名 ※はScopus収録ジャーナル、( )内はScopus CiteScore 2019 著者※はCTR研究員
要旨[ ]内はキーワード	
2020年4月 	<p>The measurement model of leisure constraint negotiation in leisure-time physical activity context: Reflective or formative? [Journal of Leisure Research] ※ (1.5)</p> <p>※Shintaro Kono, Faculty of Kinesiology, Sport, and Recreation, University of Alberta                      ※Eiji Ito, Faculty of Tourism, Wakayama University                      Angela Loucks-Atkinson, School of Human Kinetics and Recreation, Memorial University</p>
<p>There are two types of measurement models: reflective and formative. Kyle and Jun critiqued that while past leisure constraints studies assumed the reflective model, the formative counterpart may better fit extant measures; this was empirically supported by Kono, Ito, and Loucks-Atkinson. The purpose of this short research note is to extend this key methodological discussion to the realm of constraint negotiation, another important construct in the leisure constraint theory. We present theoretical reasons why existing negotiation measures may be formatively modeled (e.g., non-interchangeable items). Then, we analyzed two data sets (n¼618 and 218, respectively) in the context of leisure-time physical activities using confirmatory tetrad analysis in partial least squares. Our results showed that parts of negotiation measures followed the formative model, while the majority fit the reflective model. We theorize that these mixed results are influenced by factors including negotiation types and population characteristics.                      [Confirmatory tetrad analysis; Leisure constraint negotiation; Leisure-time physical activity; Measurement]</p>	

出版年月	タイトル[ ]内はジャーナル／著書名、出版社名 ※はScopus収録ジャーナル、( )内はScopus CiteScore 2019
	著者※はCTR研究員
要旨[ ]内はキーワード	
2020年4月	Mountains as a Global Heritage: Arguments for Conserving the Natural Diversity of Mountain Regions [Heritage]
	※Abhik Chakraborty, Faculty of Tourism, Wakayama University
<p>This concise review posits the urgent need for conserving the natural diversity of mountain environments by envisioning mountains as a global natural heritage. Mountains are recognized as cradles of biodiversity and for their important ecosystem services. Mountains also constitute the second most popular outdoor destination category at the global level after islands and beaches. However, in the current age of accelerating global environmental change, mountain systems face unprecedented change in their ecological characteristics, and consequent effects will extend to the millions who depend directly on ecosystem services from mountains. Moreover, growing tourism is putting fragile mountain ecosystems under increasing stress. This situation requires scientists and mountain area management stakeholders to come together in order to protect mountains as a global heritage. By underlining the salient natural diversity characteristics of mountains and their relevance for understanding global environmental change, this critical review argues that it is important to appreciate both biotic and abiotic diversity features of mountains in order to create a notion of mountains as a shared heritage for humanity. Accordingly, the development of soft infrastructure that can communicate the essence of mountain destinations and a committed network of scientists and tourism scholars working together at the global level are required for safeguarding this shared heritage.</p> <p>[Mountains; Natural diversity; Abiotic and biotic elements; Anthropogenic change; Global heritage]</p>	

出版年月	タイトル[ ]内はジャーナル／著書名、出版社名 ※はScopus収録ジャーナル、( )内はScopus CiteScore 2019 著者※はCTR研究員
要旨[ ]内はキーワード	
2020年5月 	Human flourishing, tourism transformation and COVID-19: A conceptual touchstone [Tourism Geographies] ※ (5.0)  ※Joseph M. Cheer, Center for Tourism Research, Wakayama University, Japan
<p>As the planet remains in the grips of COVID-19 and amidst enforced lockdowns and restrictions, and possibly the most profound economic downturn since the Great Depression, the resounding enquiry asks—what will the new normal look like? And, in much the same way, tourism aficionados, policy makers and communities are asking a similar question—what will the tourism landscape, and indeed the world, look like after the pandemic? As casualties from the crisis continue to fall by the wayside, the rethinking about what an emergent tourism industry might resemble is on in earnest. Many are hopeful that this wake-up call event is an opportunity to reshape tourism into a model that is more sustainable, inclusive and caring of the many stakeholders that rely on it. And some indicators, though not all, point in that direction. In line with this, the concept of ‘human flourishing’ offers merits as an alternative touchstone for evaluating the impacts of tourism on host communities. Human flourishing has a long genesis and its contemporary manifestation, pushed by COVID-19 and applied to travel and tourism, further expands the bounds of its application. Human flourishing has the potential to offer more nuanced sets of approaches by which the impact of tourism on host communities might be measured. The challenge remaining is how to develop robust indices to calibrate human flourishing policy successes.</p> <p>[Human flourishing; Tourism impacts; Host community; COVID-19; Sustainable tourism indicators]</p>	

出版年月	タイトル[ ]内はジャーナル/著書名、出版社名 ※はScopus収録ジャーナル、( )内はScopus CiteScore 2019 著者※はCTR研究員
要旨[ ]内はキーワード	
2020年6月 	<p>Visions of travel and tourism after the global COVID-19 transformation of 2020 [Tourism Geographies] ※ (5.0)</p> <p>Alan A. Lew, Geography, Planning and Recreation, Northern Arizona University, Flagstaff, AZ, USA            ※ Joseph M. Cheer, Center for Tourism Research, Wakayama University, Wakayama, Japan            Michael Haywood, College of Management and Economics, University of Guelph, Quebec, Canada            Patrick Brouder, Vancouver Island University, British Columbia, Nanaimo, Canada            Noel B. Salazar, KU Leuven, Leuven, Belgium</p>
[COVID-19; Resilience; Future; Tourism; Travel; Transformation indicators]	
2020年7月 	<p>Geopolitical anxieties of tourism: (Im)mobilities of the COVID-19 pandemic [Dialogues in Human Geography] ※ (5.2)</p> <p>Mary Mostafanezhad, University of Hawaii at Manoa, USA            ※ Joseph M. Cheer, Wakayama University, Japan            Harg Luh Sin, Sun Yat-sen University, China</p>
<p>Bringing the political geography of tourism to bear on responses to the COVID-19 pandemic, this commentary reveals how the geopolitical anxieties of tourism are mediated by historical geographies of race as well as contemporary geoeconomic relations and the broader pivot to the Asia-Pacific region.            [Anxiety; COVID-19; Geopolitics; Geoeconomics; Tourism]</p>	

出版年月	タイトル[ ]内はジャーナル/著書名、出版社名 ※はScopus収録ジャーナル、( )内はScopus CiteScore 2019 著者※はCTR研究員
要旨[ ]内はキーワード	
2020年7月 	Tourism on small islands: The urgency for sustainability indicators [The 21st Century Maritime Silk Road Islands Economic Cooperation Forum ANNUAL REPORT ON GLOBAL ISLANDS 2019]  ※Joseph M. Cheer, Center for Tourism Research, Wakayama University, Japan
<p>To consider small islands as places for sustainable tourism—or sustainable anything, for that matter—must surely be cause for critical deliberation. Small islands as sanctuaries, or rare citadels for ecological safekeeping and tight-knit communities, runs counter to islands as sites for extraction and development, yet increasingly the latter prevails. However, the former are the precise reasons that small islands are aligned with the global travel supply chain. Consuming small islands abides with the tropical idyll narrative and, within such invocations, the exposure of small islands to externalities renders its utility to purposes that run counter to benign and constructive outcomes. Herein is the dilemma for small islands and their entanglements with tourism expansion.</p> <p>The principal question posed asks: is the proliferation of tourism on small islands enhancing the development of social-ecological resilience, or accelerating the onset of system failure? If so, how can unfolding trajectories be monitored and assessed? The UNWTO’s Mandatory Issue Areas for the observation of sustainable tourism are applied as guiding indicators. The urgency to articulate indicators of sustainable tourism development is palpable because the conceptualization of small islands as ideal tourist escapes will likely intensify. Small islands cannot afford to experience monumental blunders given their scale, adaptive capacity limitations, and relative fragility.</p>	

出版年月	タイトル[ ]内はジャーナル/著書名、出版社名 ※はScopus収録ジャーナル、( )内はScopus CiteScore 2019 著者※はCTR研究員
要旨[ ]内はキーワード	
2020年8月 	Understanding cultural variations in outdoor tourism behaviours for outdoor sport tourism development: A case of the Blue Mountains National Park [Tourism Planning & Development] ※ (2.7) ※Eiji Ito, Faculty of Tourism, Wakayama University, Wakayama, Japan
<p>Affect valuation theory holds that ideal affect differs from actual affect in that the former refers to a goal whereas the latter refers to a response. More importantly, this theory proposes that culture influences ideal affect, in which Westerners and East-Asians value high- (e.g. excitement) and low-arousal (e.g. relaxing) positive affect, respectively, more than their counterparts. Therefore, this research note aimed to examine the cultural variation in tourism behaviours proposed by the affect valuation theory among outdoor recreation tourists. Structured observations were conducted in Blue Mountains National Park, Australia. The author walked on six trails and recorded the number of walkers encountered by their cultural backgrounds. The results indicated that Western tourists actually walked on trails more than East-Asian tourists at an outdoor tourism destination, which supports the affect valuation theory. The theoretical and practical implications were discussed in light of these cultural differences in tourism behaviours.</p> <p>[Affect valuation theory; Culture; Ideal affect; Outdoor sport tourism development; Blue Mountains National Park]</p>	


出版年月	タイトル[ ]内はジャーナル/著書名、出版社名 ※はScopus収録ジャーナル、( )内はScopus CiteScore 2019 著者※はCTR研究員
要旨[ ]内はキーワード	
2020年9月 	<p>Peak-bagging and cartographic misrepresentations: a call to correction [Current Issues in Tourism] ※ (7.5)</p> <p>Michal Apollo, Department of Tourism and Regional Studies, Institute of Geography, Pedagogical University of Cracow, Cracow, Poland            Joanna Mostowska, Faculty of Geography and Regional Studies, University of Warsaw, Warsaw, Poland            Kamil Maciuk, Department of Integrated Geodesy and Cartography, AGH University of Science and Technology, Krakow, Poland            Yana Wengel, Hainan University – Arizona State University Joint International Tourism College (HAITC), Hainan, People’s Republic of China            Thomas E. Jones, College of Asia Pacific Studies, Ritsumeikan Asia Pacific University, Oita, Japan            ※Joseph M. Cheer, Center for Tourism Research, Wakayama University, Wakayama-city, Japan</p>
<p>Tourists put their trust in maps and guidebooks and they expect information within to be accurate. Unfortunately, vital information can often be incorrect such as the accuracy of altitude above sea level. Cartographic misrepresentations and the impact on tourism is the focus of this study. Altitude data from maps, guidebooks and summit signs were compared with professional measurements made by precise Global Navigation Satellite Systems receivers. Findings revealed significant discrepancies in reported peak altitudes ranging from a few and up to several hundred metres. Evidently, some of the highest summits of the mountain ranges are subject to degradation and/or change over time and this underlines cartographic misrepresentations. There are possibly other inaccuracies in scores of popular peaks around the globe and rectifying erroneous information is vital for peak-bagging visitors. The results of this exploratory stud have significant implications for the management and marketing of destinations when a mountain’s popularity is based around being the highest.</p> <p>[Mountaineering; Cartographic errors; Travel bucket list; Ego tourism]</p>	



出版年月	タイトル[ ]内はジャーナル/著書名、出版社名 ※はScopus収録ジャーナル、( )内はScopus CiteScore 2019
	著者※はCTR研究員
要旨[ ]内はキーワード	
2020年9月	<p>Responsible Tourism: A Call to Action for Turbulent Times [Asian Journal of Business Research] ※ (0.1)</p> <p>Hiram Ting, Faculty of Hospitality and Tourism Management, UCSI University, Malaysia  Lim Xin Jean, School of Business and Economics, Universiti Putra Malaysia, Selangor, Malaysia  Leong Choi Meng, Faculty of Business and Management, UCSI University, Sarawak, Malaysia  Jun-Hwa Cheah, School of Business and Economics, Universiti Putra Malaysia, Selangor, Malaysia  ※Joseph M. Cheer, Center for Tourism Research, Wakayama University, Japan</p>
<p>The magnitude in which global crises and the ongoing societal challenges affects our life has called for attentions to be more socially responsible, environmentally friendly and caring for the wider community. A lot has been said recently about tourism restart or recovery as a consequence of COVID-19, highlighting the need for greater pragmatism and responsibility in the midst of turbulence, further emphasising the relevance for responsible tourism practice and scholarship. The present editorial serves as a foundation that provides an overview of the development of responsible tourism, offering a synthesis of key literature and sources regarding responsible tourism that can help guide future investigations. A bibliometric analysis of responsible tourism was conducted in Web of Science (WOS) database and subsequently 94 articles were used in the final review. While the results show the relevance of sustainable practices, behavioural factors and value creation by multiple stakeholders, they underscore the need for more and better efforts to delve into and realise responsible tourism in the contemporary environment.</p> <p>[Responsible Tourism; Sustainability; COVID-19, Value; Stakeholders, Behaviour]</p>	

出版年月	タイトル[ ]内はジャーナル/著書名、出版社名 ※はScopus収録ジャーナル、( )内はScopus CiteScore 2019
	著者※はCTR研究員
要旨[ ]内はキーワード	
2020年9月 	Journal of Leisure Research special issue 'A Social Psychology of Leisure 2.0' [Journal of Leisure Research] ※ (1.5)  ※Shintaro Kono, Faculty of Kinesiology, Sport, and Recreation, University of Alberta ※Eiji Ito, Faculty of Tourism, Wakayama University Angela Loucks-Atkinson, School of Human Kinetics & Recreation, Memorial University of Newfoundland
2020年9月 	Relationships of involvement and interdependent happiness across a revised Masters Games participant typology [Journal of Sport and Tourism] ※ (3.2)  ※Eiji Ito, Faculty of Tourism, Wakayama University, Wakayama, Japan
<p>This study aimed to examine the relationships between involvement and happiness across a typology of Masters Games participants. The typology of Trauer, Ryan, and Lockyer [(2003). The South Pacific Masters' Games – competitor involvement and games development: Implications for management and tourism. <i>Journal of Sport &amp; Tourism</i>, 8(4), 240–259. doi:10.1080/1477508032000161564] was revised and the following four groups of Masters Games participants were created: Games Competitor (high fun-orientation, high competition-orientation), Games Enthusiast (high fun-orientation, low competition-orientation), Serious Competitor (low fun-orientation, high competition-orientation), and Novice (low fun-orientation, low competition-orientation). An online survey was conducted by 449 Japanese people who had participated in Masters Games within the last three years. An importance-performance analysis was employed to categorise the participants into the four groups. Multiple regression analyses were subsequently performed for each of the four groups. The analyses identified that with interdependent happiness, (a) attraction was positively correlated for Games Competitor, Serious Competitor, and Novice, (b) centrality was positively correlated for Games Competitor and Games Enthusiast, and (c) social bonding was positively correlated for Games Competitor, Games Enthusiast, and Novice. These results suggest that this revised typology for Masters Games participants is an effective framework for understanding involvement and interdependent happiness and can be used in the development of promotional/marketing strategies. In particular, under the extraordinary circumstances of the COVID-19 pandemic, in which people show less concern for leisure activities including masters sports, such evidence-based promotional/marketing strategies will be needed for re-energising the Masters Games culture and for enhancing participants' health and well-being following the COVID-19 pandemic.</p> <p>[COVID-19; Interdependent happiness; Japan; Masters Games participant typology; Sport tourism]</p>	

出版年月	タイトル[ ]内はジャーナル/著書名、出版社名 ※はScopus収録ジャーナル、( )内はScopus CiteScore 2019
	著者※はCTR研究員
要旨[ ]内はキーワード	
2020年10月 	<p>(Chapter 10) Performative Nationalism in Japan's Inbound Tourism Television Programmes: YOU, Sekai! (The World), and the Tourism Nation [1st Edition Understanding Tourism Mobilities in Japan, Routledge]</p> <p>※Adam Doering, Faculty of Tourism, Wakayama University, Wakayama, Japan ※Tsz Hei Kong, Junior Research Fellow, Center for Tourism Research (CTR), Wakayama University, Japan</p>
2020年11月 	<p>Supplemental tourism activities: a conceptual framework to maximise sport tourism benefits and opportunities [Journal of Sport and Tourism] ※ (3.2)</p> <p>※Eiji Ito, Faculty of Tourism, Wakayama University, Wakayama, Japan James Higham, Department of Tourism, Otago Business School, University of Otago, Dunedin, New Zealand</p>
<p>Theoretical integration has been called for in sport tourism research in order to capture the synergies of existing contributions. In response, this article proposes a conceptual framework of supplemental tourism activities, which are motivated by secondary and/or tertiary tourism attractions that complement or reinforce tourism benefits and opportunities bestowed by a primary tourism attraction. This is achieved by integrating the sport and non-sport interactions into Hinch and Higham's (2001) sport tourism attraction system. The conceptual framework presents three types of supplemental tourism activities that interplay not only within the four categories of sport tourism attractions (spectator-based events, participation-based events, active sports, heritage sports), but also across non-sport tourism attractions. The theoretical and practical implications are discussed in the specific context of Japan, and future directions for research are identified. A clear appreciation of supplemental tourism activities will help regional and national tourism organisations and businesses to understand and maximise the tourism benefits and opportunities associated with sports.</p> <p>[Sport tourism; Conceptual framework; Supplemental tourism activities; Portfolio; Japan]</p>	

出版年月	タイトル[ ]内はジャーナル／著書名、出版社名 ※はScopus収録ジャーナル、( )内はScopus CiteScore 2019
	著者※はCTR研究員
	要旨[ ]内はキーワード
2020年12月 	Community art festivals and sustainable rural revitalisation [Journal of Sustainable Tourism] ※ (6.4)  Meng Qu, Graduate School of Integrated Arts and Sciences, TAOYAKA Program Cultural Creation Course, Hiroshima University, Hiroshima, Japan ※ Joseph M. Cheer, Center for Tourism Research, Wakayama University, Japan
<p>The links between art events and sustainable development in rural contexts where revitalisation is pressing is becoming increasingly obvious. The village of Mitarai is an example of a small peripheral community in Japan faced with the impacts of depopulation, ageing and socio-economic decline. The urgency to stem further regression has seen art emerge as an antidote for community strengthening. Since 2017, Shiosai, a week-long community art festival has taken place with the underlying aim to rejuvenate the area's diminishing fortunes. It exhibits artworks paying homage to local landscapes (Cheer, Cole, Reeves &amp; Kato, 2017) and employs local cultural heritage as key elements. The extent to which bottom-up art events in small rural communities can serve as a vehicle for sustainable development is examined. Findings suggest that the Shiosai drives visitation to the area and has reinvigorated latent cultural heritage. The festival stimulates inward migration and enhances community resilience and vital social capital. However, as the festival is driven from the bottom-up without external support, the extent of future local-level involvement remains a critical success factor. The implications suggest that community engagement is a vital ingredient in the mobilisation of festivals in rural contexts, as well as in ensuring that sustainable development outcomes can be optimised.</p> <p>[Rural revitalisation; Community art festivals; Community development; Sustainable tourism; Social capital]</p>	

出版年月	タイトル[ ]内はジャーナル/著書名、出版社名 ※はScopus収録ジャーナル、( )内はScopus CiteScore 2019
	著者※はCTR研究員
要旨[ ]内はキーワード	
2020年12月	Vaccines may soon make travel possible again. But how quickly will it return — and will it be forever changed? [The Conversation]
	※Joseph M. Cheer, Professor in Sustainable Tourism, Wakayama University Colin Michael Hall, Professor in Tourism and Marketing, University of Canterbury Jarkko Saarinen, Professor in Human Geography (Tourism Studies), University of Oulu
[Tourism; Travel; Airlines; Vaccines; Airports; International travel; COVID-19]	
2021年1月	Responsible tourism: A new era of responsibility? [Journal of Responsible Tourism Management]
	※Joseph M. Cheer, Center for Tourism Research, Wakayama University, Japan; Monash University, Australia Hiram Ting, Sarawak Research Society; Faculty of Hospitality and Tourism Management, UCSI University, Malaysia; eCollege of Tourism, Hospitality, and Transportation Management, Polytechnic University of the Philippines, Philippines Choi-Meng Leong, Faculty of Business and Management, UCSI University, Malaysia
<p>The discourse on responsible tourism, although not new, has been given a new lease on life in the wake of COVID-19. Before 2020, global tourism mobilities were unparalleled with seemingly little standing in the way of the juggernaut that tourism had become. Typically, tourism is seen through an economic lens – for the jobs it provides and the impetus it gives to the coffers of governments and the wallets of tourism dependent communities. This has not changed since the tourism growth model was spawned in the 1960s and has only intensified through to the era of overtourism. In invoking the term, New Era of Responsibility, it not too subtly suggests that for global tourism, the reframing that needs to take place is urgent and has been expedited by the pandemic of 2020. What is called for has been broached before and if tourism is to be the panacea of the catalogue of things ascribed to it, business as usual is surely not feasible. The call for an epoch where responsibility is assumed reverberates in talking circles that reference the Anthropocene as a time when the urgency to act with greater responsibility is now, more than ever, vital, given that the demands put upon the planet continue to intensify while the requisite attention needed to allow recovery and replenishment, and to stave off system failure, continually deteriorates. Tourism has become entrenched as a lifestyle phenomenon for many, and a livelihood source for as many more. The call for responsible tourism appeals to finding the balance between competing priorities and most importantly, to acknowledge planetary limitations.</p> <p>[Responsible tourism; Sustainable tourism; Overtourism; Tourism degrowth]</p>	

出版年月	タイトル[ ]内はジャーナル/著書名、出版社名 ※はScopus収録ジャーナル、( )内はScopus CiteScore 2019
	著者※はCTR研究員
要旨[ ]内はキーワード	
2021年3月	<p>Determining peak altitude on maps, books and cartographic materials: Multidisciplinary implications [Remote Sensing] ※ (6.1)</p> <p>Kamil Maciuk, Department of Integrated Geodesy and Cartography, AGH University of Science and Technology, Cracow, Poland  Michal Apollo, Department of Tourism and Regional Studies, Institute of Geography, Pedagogical University of Cracow, Cracow, Poland  ※Joseph M. Cheer, Center for Tourism Research, Wakayama University, Wakayama-city, Japan  Ondřej Konečný, Faculty of Regional Development and International Studies, Mendel University in Brno, Brno, Czech Republic  Krystian Koziół, Department of Integrated Geodesy and Cartography, AGH University of Science and Technology, Cracow, Poland  Jacek Kudrys, Department of Integrated Geodesy and Cartography, AGH University of Science and Technology, Cracow, Poland  Joanna Mostowska, Faculty of Geography and Regional Studies, University of Warsaw, Warsaw, Poland  Marta Róg, Department of Integrated Geodesy and Cartography, AGH University of Science and Technology, Cracow, Poland  Bogdan Skorupa, Department of Integrated Geodesy and Cartography, AGH University of Science and Technology, Cracow, Poland  Stanisław Szombara, Department of Integrated Geodesy and Cartography, AGH University of Science and Technology, Cracow, Poland</p>
<p>Mountain peaks and their altitude have been of interest to researchers across disciplines. Measurement methods and techniques have changed and developed over the years, leading to more accurate measurements and, consequently, more accurate determination of peak altitudes. This research transpired due to the frequency of misstatements found in existing sources including books, maps, guidebooks and the Internet. Such inaccuracies have the potential to create controversy, especially among peak-baggers in pursuit of climbing the highest summits. The Polish Sudetes Mountains were selected for this study; 24 summits in the 14 mesoregions were measured. Measurements were obtained employing the global navigation satellite</p>	

system (GNSS) and light detection and ranging (LiDAR), both modern and highly precise techniques. Moreover, to determine the accuracy of measurements, several of the summits were measured using a mobile phone as an additional method. We compare GNSS vs. LiDAR and verify the level of confidence of peak heights obtained by automatic methods from LiDAR data alone. The GNSS receiver results showed a discrepancy of approximately 10 m compared with other information sources examined. Findings indicate that the heights of peaks presented in cartographic materials are inaccurate, especially in lesser-known mountain ranges. Furthermore, among all the mountain ranges examined, the results demonstrated that five of the summits were no longer classed as the highest, potentially impacting tourist perceptions and subsequent visitation. Overall, due to the topographical relief characteristics and varying vegetation cover of mountains, we argue that the re-measuring procedure should comprise two steps: (1) develop high-resolution digital elevation models (DEMs) based on LiDAR; (2) assumed heights should be measured using precise GNSS receivers. Unfortunately, due to the time constraints and the prohibitive costs of GNSS, LiDAR continues to be the most common source of new altitude data.

[Altitude determination; Cartography; GNSS; LiDAR; Mountains]

## 文化・遺産ユニット ＜著書＞

出版年月	タイトル[ ]内は出版社名
	著者／編者※はCTR研究員
2020年10月 	Tourism Development in Japan: Themes, Issues and Challenges [Routledge]
	Editors: ※Richard Sharpley, Tourism and Development, University of Central Lancashire, Preston, UK, Center for Tourism Research, Wakayama University, Japan. ※Kumi Kato, Faculty of Tourism, Wakayama University, Japan

1. Introduction: tourism in Japan – from the past to the present (Richard Sharpley & Kumi Kato)
  2. Tourism research on Japan – overview of major trends: Japanese and English-language materials (Yumiko Horita & Kumi Kato)
  3. Urban development and tourism in Japanese cities (Yumiko Horita)
  4. Transition of forest tourism policies in Japanese national forest management (Yumi Oura)
  5. A systematic review of sport tourism research in Japan (Eiji Ito & Tom Hinch)
  6. Mobilizing stoke: a genealogy of surf tourism development in Miyazaki, Japan (Adam Doering)
  7. Japan’s mountain tourism at a crossroads: insights from the North Japan Alps (Abhik Chakraborty)
  8. International exchange in tea tourism: reconceptualizing Japanese greentourism for sustainable farming communities (Amnaj Khackhruamuang)
  9. Pilgrimage tourism in regional communities: the case of Tanabe City and Kumano Kodo (Ricardo Nicolas Prozano & Kumi Kato)
  10. Confronting difficult pasts: the case of ‘kamikaze’ tourism (Richard Sharpley & Kumi Kato)
  11. Whaling heritage and tourism development – ‘sliced, diced and boiled down’ ( Simon Wearne)
  12. Debating sustainability in tourism development: resilience, traditional knowledge and community: a post-disaster perspective (Kumi Kato)
  13. International tourists in Japan: their increasing numbers and vulnerability to natural hazards (Hayato Nagai, Kaede Sano, Brent W. Ritchie & Takashi Yoshino)
  14. The expansion of peer-to-peer accommodation rentals in Japan: issues and challenges (Takahiro Ikeji & Hayato Nagai)
- Postscript (Richard Sharpley & Kumi Kato)



<研究論文>

出版年月	タイトル[ ]内はジャーナル/著書名、出版社名 ※はScopus収録ジャーナル、( )内はScopus CiteScore 2019 著者※はCTR研究員
要旨[ ]内はキーワード	
2020年4月 	'Kamikaze' heritage tourism in Japan: a pathway to peace and understanding? [Journal of Heritage Tourism] ※ (2.6) ※Richard Sharpley, Lancashire School of Business & Enterprise, University of Central Lancashire, Preston, UK
<p>Reflecting the wider belief that international tourism offers the opportunity to encourage peace and understanding amongst peoples and nations, one objective of Japan's recent tourism development policy is the enhancement of mutual understanding and the promotion of international peace. The purpose of this paper is to consider the extent to which this objective is achievable, particularly in the context of continuing controversy surrounding the country's confrontation of its twentieth century military heritage in general and its role in the Pacific War in particular. Based on research at two 'difficult' heritage sites, Chiran Peace Museum in Kagoshima Prefecture and Yūshūkan War Museum in Tokyo, it explores specifically how the kamikaze phenomenon is commemorated and interpreted for international visitors, in so doing revealing a significant degree of dissonance at both sites. Not only is a selective narrative of heroic sacrifice presented within a wider revisionist history of the Pacific War but also no attempt is made to acknowledge the prevailing cultural context that might underpin a more nuanced understanding of the kamikaze. Hence, the paper concludes that a meaningful opportunity to enhance international understanding has been missed.</p> <p>[Tourism and peace, Japan, difficult heritage, dissonance, Chiran peace museum, Yūshūkan War Museum]</p>	

出版年月	タイトル[ ]内はジャーナル/著書名、出版社名 ※はScopus収録ジャーナル、( )内はScopus CiteScore 2019 著者※はCTR研究員
要旨[ ]内はキーワード	
2020年5月 	Visitor diversification in pilgrimage destinations: Comparing national and international visitors through means-end [Tourism Geographies] ※ (5.0)  ※Ricardo Nicolas Prozano, Center for Tourism Research, Wakayama University, Wakayama, Japan ※Kumi Kato, Center for Tourism Research, Wakayama University, Wakayama, Japan ※Joseph M. Cheer, Center for Tourism Research, Wakayama University, Wakayama, Japan
<p>In contemporary society, spirituality has dissociated from the tenets of organized 'official' religion, resulting in a rise of 'private' spirituality, defined by each individual's beliefs. In this context, visitors from a great variety of national backgrounds are increasingly visiting pilgrimage sites across the globe, even if they have little to no cultural connections to them, bringing with them a diverse range of values to the pilgrimage site. Despite the growing presence of international visitors from across the globe, nationality has not been a studied factor when researching tourism in pilgrimage-related destinations. In order to bridge this research gap, the present study's objective is to examine visitor diversification in pilgrimage tourism through a study of similarities and differences of values among domestic and international visitors. Utilizing means-end as a qualitative research methodology, the two most numerous nationalities were sampled: Japanese and Australians. Fieldwork was conducted in the Nakahechi trail of Kumano Kodo, an ancient pilgrimage site located in Tanabe city (Japan) developed for international tourism. The Nakahechi route is a popular route for both domestic and international visitors due to its cultural significance, easy access and moderate challenge. Results showed a variety of similarities and differences between the sampled nationalities, demonstrating a growing diversification in sacred sites which incorporates a complex range of elements related to leisure, sports, intercultural exchange, nostalgia, escapism and relaxation, beyond a continuum of contemporary spirituality and traditional religion. In conclusion, it was observed that nationality is a fundamental factor for studying pilgrimage tourism in contemporary society. As pilgrimage sites continue to develop into international destinations, nationality is an important factor that requires further attention from academics. Results also have practical implications for local administrations aiming to develop their pilgrimage resources to international visitors.</p> <p>[Pilgrimage; Tourism; Nationality; Japan; Kumano Kodo; Means-end]</p>	

出版年月	タイトル[ ]内はジャーナル/著書名、出版社名 ※はScopus収録ジャーナル、( )内はScopus CiteScore 2019 著者※はCTR研究員
要旨[ ]内はキーワード	
2020年6月 	Tourism, sustainable development and the theoretical divide: 20 years on [Journal of Sustainable Tourism] ※ (6.4)  ※Richard Sharpley, Lancashire School of Business & Enterprise, University of Central Lancashire, Preston, UK
<p>A conceptual paper published twenty years ago concluded that sustainable tourism development is an unviable objective. Specifically, it argued that environmentally sound tourism development (sustainable tourism) is essential; sustainable development through tourism, however, is unachievable. Despite continuing alignment between tourism and sustainable development in both academic and policy circles, not only have the intervening two decades proved this argument in practice to be correct, but also there is little evidence of a more sustainable tourism sector. This paper, therefore, returns to the theoretical relationship between tourism and sustainable development, considering more recent transformations in understandings of the concept of development as well as contemporary approaches to sustainable development. Highlighting the controversy surrounding the continuing adherence to economic growth in development policy in general and tourism development in particular, it discusses sustainable de-growth as an alternative approach to development and, in the context of increasing concerns over climate change, the specific implications for tourism.</p> <p>[Sustainable tourism; Sustainable development; Economic growth model; Sustainable de-growth]</p>	
2020年10月 	(Chapter 10) Pilgrimage and Tourism in Japan: Shift in Values and Motivation [Pilgrims: Values And Identities, CABI]  ※Ricardo Nicolas Prozano, Center for Tourism Research, Wakayama University, Wakayama, Japan ※Kumi Kato, Faculty of Tourism, Wakayama University, Wakayama, Japan

## 2.1.2. 登録研究プロジェクト一覧

### 2.1.2.1. 科学研究費助成事業採択研究課題

文部科学省及び日本学術振興会が交付する科学研究費助成事業に採択され、CTR研究員が代表者として取り組む研究プロジェクトは以下の通り(掲載希望課題のみ)。

研究種別	代表者	研究課題	研究分野
基盤研究 B	Brent W. Ritchie	Protecting international tourists from harm: Developing an effective tourist hazard information system	観光学
	Richard Sharpley	Confronting difficult past: Dark Tourism development in Japan:	観光学
	加藤 久美	サステナブルツーリズムによるSDGsの推進:レジリエンスを基盤として	観光学
	八島 雄士	観光目的地の競争優位性:訪日客の増加を契機とするDMOマネジャーの役割の変容	観光学
基盤研究 C	小野 健吉	我が国の庭園観光の適切かつ持続的な推進に向けた研究	観光学
	木川 剛志	「直接経験」に基づく都市形成モデルの研究:地方都市の立地適正化計画を事例として	都市計画・建築計画
	齊藤 広晃	The role of staff breakrooms in employees' psychophysiological recovery, well-being, and performance	経営学
	佐野 楓	ビッグデータの活用によるスマートツーリズム・destinationの構築と価値共創観光学	観光学
	富田 晃彦	国際連携による幼児期の天文教育の研究	科学教育
	東 悦子	移民県和歌山における移民をめぐる記憶と遺物の保存と継承	地域研究
若手研究	Abhik Chakraborty	山岳地域における環境変化と観光資源レジリエンスの包括的分析	観光学
	Ricardo Nicolas Prozano	Analysis of tourism guiding in pilgrimage: Model for perception of role of guides	観光学
	伊藤 央二	世界遺産の参詣道「熊野古道」を歩くことで得られる意味深い心理的経験の実証研究	観光学
	永井 隼人	Attitudes of non-host city residents toward a mega-event during the pre-event stage: A longitudinal study	観光学

若手研究B	山口 志郎	トレイルランニングにおけるリスクマネジメントと参加者のリスク認知に関する実証研究	スポーツ科学
国際共同 研究加速基金 (国際共同 研究強化(B))	加藤 久美	Enhancing Social-Ecological Resilience through Sustainable Tourism Governance in post-corona era: Traditional value-based approach for Community Vision, Capacity and Leadership.	社会学
	齊藤 広晃	Inducing pro-environmental behavior in tourists for the sustainable development of Japan's tourism and hospitality industries	経済学、 経営学

## 2.1.2.2. CTR助成研究プロジェクト

### <CTR研究支援プログラム>

CTRミッション「観光学研究の高度化を通じて健全で持続可能な社会の発展に寄与する」を踏まえ、下記の優先目標を考慮した研究プロジェクトを推進し、観光学研究の高度化・国際化を図ることを目的に、研究費助成を行う。CTR内部の競争的資金の位置づけで、CTRミッションと下記のキーワードいずれか及び、国連が掲げる「持続可能な開発目標(SDGs)」達成に貢献する内容であることを求める。

#### ■優先目標

- ①日本、アジア太平洋地域における観光学研究の牽引
- ②国内外の主要な観光学研究機関との連携強化

#### ■研究推進にあたるキーワード

- ①Ethics and Responsibility
- ②Diversity and Equity
- ③Community and Environment

2020年度採択課題は以下の通り。各課題の概要と活動報告は、CTRウェブサイト(<http://www.wakayama-u.ac.jp/ctr/research/projects/ctrsupport/2020/index.html>)に掲載。

代表者	研究課題
木川 剛志	地方誘客におけるDX と儀礼的暗黙値の影響についての研究
富田 晃彦	観光を含む広義の宇宙・天文教育についての基礎的研究
八島 雄士	都市間関係の新たな展開の探索：震災からの学びとパンデミック後の復興と持続へのチャレンジ

本プログラムは、学部横断的なプロジェクトに加え、客員研究員の参加や、前年度の短期研究員招へい制度から展開した国際共同研究等、学内外での共同研究を進める枠組みとして定着してきている。また、前年度採択プロジェクトが、本年度の科研費採択や観光庁からの受託事業につながっており、さらなる外部資金獲得につなげるスタートアッププロジェクトの機能としても着実に効果が出始めている。

### 2.1.3. 産官学連携プロジェクト

#### ●バーチャルツアー制作産学連携プロジェクト

CTR研究員の尾久土正己教授とCTR客員フェロー小形正嗣氏(関西テレビ放送株式会社)らが、産学連携プロジェクトとして取り組んだバーチャルツアー動画「VRで巡る世界のたび」がYouTubeで公開された。これは、2019年にXRコンテンツにおける技術協力に関する協定を締結した関西テレビ放送株式会社、株式会社阪急交通社、本学観光学部の三者で進めている、観光産業への映像コンテンツ提供ならびにシステム展開のための技術研究の一環として制作された。この度のコロナ禍を受け、今すぐにでも可能な社会貢献を実践するプロジェクト「#いまできること」として、ステイホーム中に少しでも海外旅行に行った気分を味わえるよう、事前に撮影を行っていた3か所(スペイン、マチュピチュ、ウユニ塩湖)のバーチャルツアー公開に至った。動画撮影、解説は阪急交通社の添乗員が担当し、本学が機材提供・監修、関西テレビが編集を行い、阪急交通社公式YouTubeチャンネル

(<https://www.youtube.com/playlist?list=PL8I0Y2w0uqN2quHDOOQvIAvKbiWujgQ6i>)で公開されている。

#### ●観光庁・UNWTO駐日事務所発行「日本版持続可能な観光ガイドライン」開発協力

2020年6月29日、観光庁、及びUNWTO駐日事務所が「日本版持続可能な観光ガイドライン」を公表した。これは、観光客と地域住民の双方に配慮し、多面的かつ客観的なデータ計測と中長期的な計画に基づく総合的な観光地マネジメントが重要となってきた中で、自治体や観光地域づくり法人(DMO)等が効果的で持続可能な観光地マネジメントを行うための指標を定めている。日本の特性を反映したうえで、観光地向けの持続可能な観光の国際基準「GSTC-D(Global Sustainable Tourism Criteria for Destinations)」に準拠している。本ガイドラインの作成には、CTR研究員の加藤久美教授をはじめCTR研究員有志が関与するとともに、本学観光学部・観光学研究科の学生も協力した。



また、加藤教授はUNWTO駐日事務所が2020年7月に設立した「APTECサステナブルツーリズム推進センター」の委員も務めている他、8月には、グローバル・サステナブル・ツーリズム協議会(Global Sustainable Tourism Council [GSTC])の理事に日本人で初めて選出された。

#### ●観光ビッグデータに関する産官学共同研究

和歌山県が誇る世界遺産、高野山を対象とした観光ビッグデータに関する産官学連携共同研究にCTR研究員が参画している。本プロジェクトは、和歌山県高野町、株式会社JTB、南海電気鉄道株式会社、西日本電信電話株式会社(NTT西日本)和歌山支店、NTTタウンページ株式会社、株式会社紀陽銀行、和歌山県データ活用推進センター、和歌山大学から構成されており、各組織が収集した観光に関連するデータを集約し、渋滞対策や電車の運行計画も含む、高野山地域の観光施策に活用する高度なデータ分析モデルの構築を目指す。本学からは、CTR研究員の吉野孝教授、尾久土正己教授、木川剛志教授のチームが、集約されたビッグデータの分析を行っている。

#### 2.1.4. 「2020年度CTR研究集会」開催

新型コロナウイルスの影響により、4年目となる本集会は、初のオンライン開催となった。例年通り、CTR研究支援プログラム採択課題(36ページ参照)の中間報告及びCTR専任研究員の活動報告の他、本学観光学研究科博士後期課程の学生3名による研究発表が11月13日(金)に行われた。場所を選ばないバーチャル開催ということもあり、CTR客員フェローを中心に世界30以上の国・地域からの参加があり、参加者数も過去最多を数えた。また、本学特別主幹教授3名も全員が各国から参加し、共同研究への展開やさらなる学生の参加等、今後への期待が述べられた。学内に留まらないオープンな発表の場となったことで期待以上の盛り上がりとなったため、次年度以降もオンラインでの開催を検討する。

※本集会のアブストラクト集は、CTRウェブサイトからダウンロード可能。

<http://www.wakayama-u.ac.jp/ctr/news/2020110200051/>



#### 2.1.5. 論文集出版

##### ●「Tourism development in Japan – Themes, issues and challenges」出版

本学特別主幹教授のRichard Sharpley CTR副センター長及び加藤久美教授が編集者を務め、日本の観光に焦点を当てた書籍が10月にRoutledge社から出版された。これは、国際的研究拠点形成のための基盤づくり、また本学における観光研究成果を広く国外にも紹介することを目的とした組織的な取組みとして、CTR研究員を中心に執筆、編集を行い、2018年1月に刊行された国際的学術誌 Tourism Planning & Development 特集号Vol 15, Issue 1, Tourism development in Japan- Issues and Challenges – a focus on regions and communitiesを土台としている。特集号執筆者10名に、8名の新たな執筆者を加え(現CTR研究員計12名)、14章がまとめられた。すべて英語論文であり、日本の観光研究を世界に発信するマイルストーン的書籍となった。

※目次等詳細<https://www.wakayama-u.ac.jp/ctr/news/2020110500014/>



##### ●「Wakayama Tourism Review」発行

今年度より研究ユニットを再編したことを受け、CTR研究員の活動紹介カタログとしてユニット別の論文集第1巻を発行した。各ユニットに所属する研究員により執筆された現在取り組んでいる研究プロジェクトに関する論文を収録し、CTRウェブサイト上で公開した。

※目次等詳細

<http://www.wakayama-u.ac.jp/ctr/news/2021032600110/>







## 2.2.2. イベント開催支援

### ●「第3回日本国際観光映像祭」開催

CTR研究員の木川剛志教授が代表を務め、CTRが実行委員会の構成員である「日本国際観光映像祭」(<https://jwtf.world/>)が、今年度はオンラインで開催された。苦難の時期を乗り越えるべく、観光の持つ力を信じ平和への希求を発信するため、メイン会場となった京都の清水寺での法要から幕を開けた。主なプログラムはこれまで同様に、観光映像の質向上やSDGsへの配慮、観光交流促進を目指して国内外の観光映像を集め、表彰した他、指定期間内に映像を制作するArt & Factoryというスタイルを取り入れた企画が鹿児島県の与論島を舞台に実施された。これは、同映像祭が2020年11月に加盟を果たした国際的な観光映像祭ネットワークCIFFT(41ページ参照)の傘下にあるポルトガルの映像祭でも取り入れられている手法で、限られた時間内に現地の魅力を伝える映像作品を制作するコンペティションで、優れた映像作家の発掘も期待されている。また、本映像祭を契機に2021年3月に設立された「観光映像プロモーション機構」との連携を強化し、観光映像を軸に、観光地経営の推進に貢献するポータルサイト「Sustainable Tourism LABO」(<https://jwtf.world/tourismlabo/>)の開設や観光マーケティングシステムの確立が進んでいる。



## 2.2.3. 観光学部授業科目の開講支援

### ●特別主幹教授及びCTR専任研究員による授業科目開講支援

本学特別主幹教授2名とCTR専任研究員2名が、観光学部及び観光学研究科の一部科目(観光学部科目に関してはグローバル・プログラム(GP)対象科目)の開講を支援した。特別主幹教授の科目は主に、CTR研究員との共同担当として集中講義の形式をとった。2020年度開講科目は下記の通り。

#### ■担当科目一覧

##### 観光学部

科目名	担当者
Critical Issues in Tourism A	Ricardo Nicolas Prozano
Community Based Tourism	Joseph M. Cheer
Sustainability and Management	Graham Miller

## 観光学研究科

科目名	担当者
Tourism and Heritage Management (M)	Ricardo Nicolas Prozano
Critical Issues in Community Based Tourism(M)	Joseph M. Cheer
Sustainability and Management (M)	Graham Miller
Tourism Development and Community(M)	Richard Sharpley

### 2.2.4. 外部機関連携活動の支援

#### ●CIFFT加盟

アジアで初めて、かつ唯一の映像祭として、CTR研究員の木川剛志教授が代表を務め、CTRが実行委員会の構成員となっている「日本国際観光映像祭」が2020年11月にInternational Committee of Tourism Film Festivals (CIFFT)への加盟を果たした。CIFFTとは、世界15の国際観光映像祭から構成される、国連世界観光機関(UNWTO)認定の観光映像祭連合で、観光産業PRの映像配信や表彰を通して作品の質を評価しており、各国の行政・有識者や観光事業者による審査が行われることで、世界的な注目が集まる。本加盟を契機に、日本を中心としたアジアでも観光映像をコンテンツとした世界的な交流が活発化することが期待される。CTRも、同映像祭を核としたデジタルマーケティングを通じて持続可能な観光発展を図る、産学連携による新しい時代のエコシステム構築に貢献していく。



### 2.2.5. 学内FD・SD活動支援

#### ●Zoomマニュアル作成

2020年度に開催したオンラインセミナー(ウェビナー)の実績を活かし、Zoomビデオコミュニケーションズ社の提供するビデオウェビナー機能を利用したウェビナー運用手法についてまとめた「Zoomウェビナーマニュアル」を作成した。今後、他部局でも同様のウェビナー実施が想定されることから、学内限定で教職員に本マニュアルを共有した。こういった新しいツールは導入に時間を要するため、こういったノウハウ共有は業務効率化に多大な貢献となった。

## 2.3. 広報、アウトリーチ、アドボカシー

### 2.3.1. セミナー集録発行

#### ●観光教育研究セミナーシリーズ「スポーツツーリズム～メガイベントが日本社会を変える～」報告書

CTRが開所した2016年より毎年開催してきたセミナーシリーズが今年度で最終回を迎え、スポーツイベントとそれに伴うスポーツツーリズムが日本社会に与える影響について議論してきたこれまでの全5セッションを書き起こし、実施報告書として集録を発行した。和歌山大学学術リポジトリにて閲覧可能。

※目次等詳細

<http://www.wakayama-u.ac.jp/ctr/news/2021031800023/>

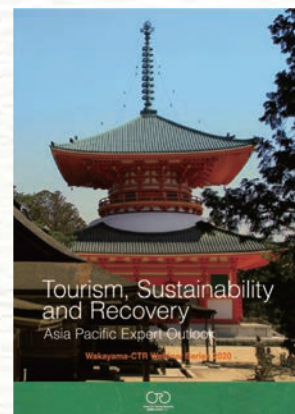


#### ●Wakayama-CTR Webinar Series 2020報告書

今年度、新たな取り組みとして始めたウェビナーシリーズ「Tourism, Sustainability and Recovery: Asia Pacific Expert Outlook」(43ページ参照)をより広く研究や教育に役立てていただけるよう、全4回の書き起こしを集録化した。録画動画とともにオンライン公開しており、自由に閲覧可能。

※目次等詳細

<https://www.wakayama-u.ac.jp/ctr/news/2021031100024/>



### 2.3.2. ニュースレター発行

「CTR Newsletter」を毎年9月と3月に発行し、CTRが取り組む研究や教育支援活動、国内外の観光関連研究情報を紹介している。

CTRウェブサイト

(<http://www.wakayama-u.ac.jp/ctr/resource/newsletter.html>)からPDFファイルのダウンロードも可能。



### 2.3.3. LinkedIn公式ページ開設

2020年7月に、CTRのLinkedIn公式ページ

(<https://www.linkedin.com/company/center-for-tourism-research>)を開設した。CTRウェブサイトと並行して、最新のイベント情報やCTR研究員の出版情報、研究活動について発信している。



### 2.3.4. CTR紹介動画制作

プロモーションビデオとしてCTRの研究者やスタッフ、活動を紹介するショートクリップを制作した。アジアにおける観光学研究を牽引していく機関として飛躍していくこと、そしてCTRが重きを置く観光発展への想いを込めており、世界に発信することを意識して和歌山県の美しい自然や四季の移ろいもアクセントになっている。動画は、CTRウェブサイトの他、和歌山大学公式YouTubeチャンネル (<https://www.youtube.com/user/wakayamauniv>) で公開している。



### 2.3.5. 外部機関との連携促進

#### ●CTR Webinar Series開催

新型コロナウイルスCOVID-19のもたらしたパンデミックによる観光業界への大打撃に観光学研究所として世界に貢献すべく、CTRではオンラインセミナー(ウェビナー)「Wakayama- CTR Webinar Series 2020」の配信を2020年7月に開始した。太平洋アジア観光協会(PATA)、UNWTO駐日事務所、一般財団法人関西観光本部の後援を得て、「Tourism, Sustainability and Recovery: Asia Pacific Expert Outlook」をテーマに、世界の著名な研究者やアジア太平洋地域の観光研究を精力的に進めている研究者らの講演や議論を世界中と共有することを目指し、4ヶ月間にわたり毎月、Zoomでのウェビナーライブ配信を行った。世界53カ国・地域から延べ600名以上のライブ参加(視聴)を得たが、より広く研究や教育に役立てていただけるよう録画動画をCTRウェブサイト

(<http://www.wakayama-u.ac.jp/ctr/research/webinar/index.html>)及び和歌山大学公式YouTubeチャンネル(<https://www.youtube.com/user/wakayamauniv>)で公開している。全て英語での実施だが、YouTubeの簡易翻訳字幕機能の利用が可能。また、書き起こし集録として、シリーズ実施報告をまとめ出版した(42ページ参照)。



なお、UNWTOが定めた毎年9月27日の「世界観光の日(World Tourism Day / WTD)」にちなみ、9月に開催したウェビナーをWTD記念ウェビナーとし、UNWTOのWTD特設ウェブページ(<https://www.unwto.org/node/11228>)に賛同イベントとして登録した。



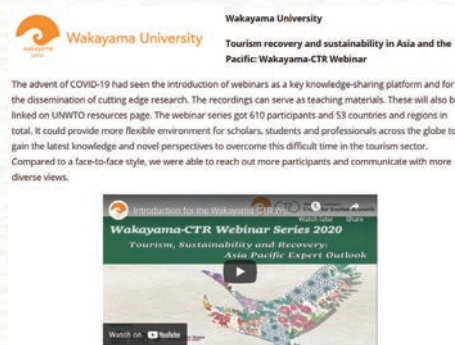
## ●UNWTO Academy「Digital Resources」への情報提供

UNWTOの教育部門であるUNWTO Academyのウェブサイト内、「Digital resources」ページ(<https://www.unwto.org/academy/digital/resources>)にCTRが実施した上述のウェビナーシリーズ「Wakayama-CTR Webinar Series 2020」のアーカイブ情報が掲載された。この特集ページは、UNWTO賛助会員やUNWTO、TedQual認証の取得機関が取り組むオンラインプログラムのリストで、CTRからは、同ウェビナーシリーズの各セッション情報及び動画公開ページへのリンクを提供した。



## ●UNWTO賛助会員総会への動画出展

「Recovering Tourism. Rebuilding Trust. Reinforcing Partnerships」をテーマに11月5～6日にスペインのマドリッドで開催された「The 42th UNWTO Affiliate Members Plenary Session」の特別企画である「AM Virtual Corner」に、上述の「Wakayama - CTR Webinar Series 2020」の紹介動画を出展した。これは、新型コロナウイルスによる世界的危機に対抗するために各国の賛助会員が取り組んでいる活動をUNWTOの特設ウェブページ(<https://www.unwto.org/unwto-affiliate-members-virtual-corner>)内で紹介し、世界と共有する企画である。アジアから唯一、CTRのウェビナーシリーズの情報も採用され、多様かつ学術的知見を提供することに貢献している。



## 2.3.6. メディア出演

### ●シンガポールのテレビ番組出演

シンガポールのニュース番組8 WorldにCTR専任研究員、Joseph Cheer特任教授が出演し、ワクチンパスポートについての見解を述べた録画動画が公開されている。

「焦点 | 疫苗护照 让世人早圆出国旅游梦?」(2021年3月12日, 8 World)

<https://www.8world.com/vodcasts/episode/full/focus-vaccine-passport-1416571>

### ●Nikkei Asiaへのコメント提供

CTR専任研究員、Joseph Cheer特任教授がNikkei Asiaの取材を受けた記事が公開された。新型コロナウイルスによるパンデミックを受け、各国で開発が進むワクチンパスポートについて、世界の最新事情と見解を語っている。

「Vaccine passports: Can they save #travel? Should they?」

(2021年3月24日,Nikkei Asia)

<https://asia.nikkei.com/Spotlight/The-Big-Story/Vaccine-passports-Can-they-save-travel-Should-they>

### 2.3.7. 学会、イベント参加等

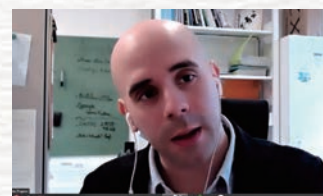
CTRスタッフが出席したイベントは以下の通り。

日程	イベント名	主催
10/14	The 69th PATA Annual General Meeting (オンライン出席)	太平洋アジア観光協会 (PATA)
10/27~28	APacCHRIE 2020 (オンライン参加)	Asia-Pacific Council on Hotel, Restaurant, and Institutional Education (APacCHRIE) 2020 Committee; School of Hotel and Tourism Management, The Hong Kong Polytechnic University
11/24	第16回 UNWTO活用検討会(東京)	観光庁
12/15~16	2nd ICCA Asia Pacific Chapter Summit 2020 (オンライン参加)	International Congress and Convention Association (ICCA) Asia Pacific Chapter; 横浜市; 公益財団法人横浜観光コンベンション・ビューロー; パシフィコ横浜
12/16	ガストロノミー・ツーリズム 国際シンポジウム2020 (オンライン参加)	UNWTO駐日事務所; 一般財団法人アジア太平洋交流センター; 奈良県
2/9~12	CAUTHE 2021 (オンライン参加)	Council for Australasian Tourism and Hospitality Education (CAUTHE)
3/23	第17回UNWTO活用検討会 (オンライン出席)	観光庁

### 2.3.8. 学会スポンサー参加

#### ●「CAUTHE 2021」

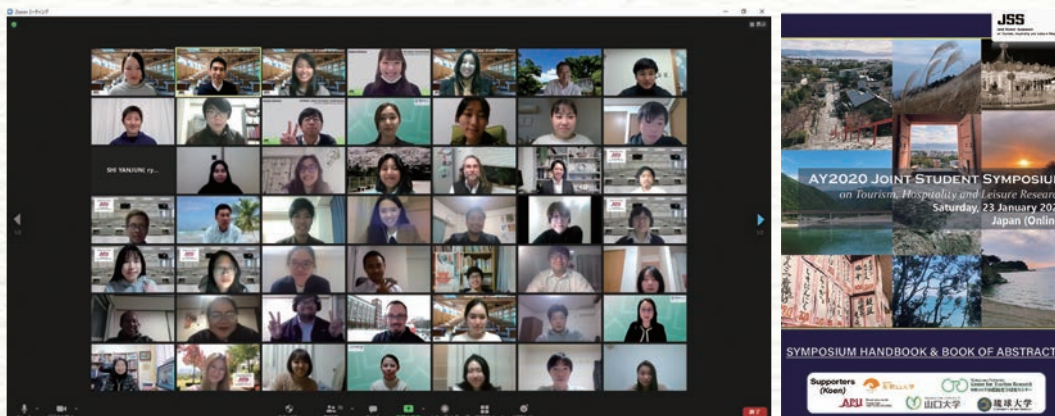
2月9日(火)~12日(金)にオンラインで開催されたCouncil for Australasian Tourism and Hospitality Educationの年次大会CAUTHE2021にスポンサーとして参加し、CTR専任研究員のNicolas Prozano特任講師が研究発表を行った。「Transformations in Uncertain Times: Future perfect in tourism, hospitality and events」をテーマとした今大会には32か国から300名以上が参加し、137件の発表が行われた。



## 2.3.9. 学会・イベント開催協力

### ●国際学生シンポジウム後援

CTR研究員の永井隼人講師とCTR客員フェローの齊藤広晃准教授(立命館アジア太平洋大学)が共同実行委員長を務める「AY2020 Joint Student Symposium on Tourism, Hospitality and Leisure Research」の後援を行った。1月23日(土)にオンラインで開催され、本学観光学部の学生も発表を行った他、CTR研究員Adam Doering准教授が司会を務めたシンポジウムでは、本学大学院観光学研究科博士前期課程修了生でCTR客員ジュニアフェローの江子熹氏(香港理工大学大学院博士課程在学)もパネリストとして参加した。



### ●「SEAMA2021」後援

3月6(土)～7日(日)に琉球大学国際地域創造学部の主催で開催された国際学会「SEAMA 2021: Island Tourism & Hospitality Management」を昨年に引き続き後援した。同大学を会場にハイブリッド形式で行われ、約60名が参加した。1日目に実施されたパネルディスカッション「With Corona, After Corona, How the tourism survive and develop」では、CTR専任研究員のJoseph Cheer特任教授がモデレーターとして登壇し、2日目に実施されたパネルディスカッション「The future of tourism and hospitality education in Japan: Lessons learned in 2020」ではCTR研究員の永井隼人講師がパネリスト兼モデレーターとして登壇した。





### 2.3.10. セミナー等の企画・運営

- 観光教育研究セミナー(全1回)
- Wakayama-CTR Webinar Series 2020(全4回)
- シンポジウム、イベント(全2回)

開催日	イベント名／講師等／	
7/22(水)	<p>Wakayama-CTR Webinar Series 2020 Tourism, Sustainability and Recovery: Asia Pacific Expert Outlook Vol.1「COVID: Travel and Tourism」</p> <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <p>スピーカー： Brent W. Ritchie (和歌山大学 特別主幹教授、Associate Dean (Research), Faculty of Business, Economics and Law, The University of Queensland) Trevor Weltman (Chief of Staff, Pacific Asia Travel Association(PATA)) 永井 隼人(和歌山大学観光学部 講師) モデレーター： Joseph M. Cheer (和歌山大学国際観光学研究センター 特任教授)</p>	
8/19(水)	<p>Wakayama-CTR Webinar Series 2020 Tourism, Sustainability and Recovery: Asia Pacific Expert Outlook Vol.2「Recovering sustainably, global lessons for Japan's tourism industry」</p> <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <p>スピーカー： Graham Miller (和歌山大学 特別主幹教授、Executive Dean, Professor, Faculty of Arts and Social Sciences / Chair in Sustainability in Business, University of Surrey) Rochelle Turner (Head, Research and Insight, MaCher) Xavier Font (Professor, Tourism Marketing, School of Hospitality and Tourism Management, University of Surrey) 加藤 久美(和歌山大学観光学部 教授) モデレーター： Joseph M. Cheer (和歌山大学国際観光学研究センター 特任教授)</p>	



開催日	イベント名/講師等	ポスター
9/16(水)	<p>Wakayama-CTR Webinar Series 2020 Tourism, Sustainability and Recovery: Asia Pacific Expert Outlook Vol.3「Tourism, sustainability and de-growth」</p> <hr/> <p>スピーカー： Richard Sharpley (和歌山大学 特別主幹教授、Professor, Lancashire School of Business and Enterprise, University of Central Lancashire) Muchazondida Mkono (Lecturer, Tourism Management, The University of Queensland) モデレーター： Joseph M. Cheer (和歌山大学国際観光学研究センター 特任教授)</p>	
10/21(水)	<p>Wakayama-CTR Webinar Series 2020 Tourism, Sustainability and Recovery: Asia Pacific Expert Outlook Vol.4「Decarbonising academic conference travel」</p> <hr/> <p>スピーカー： James Higham (Professor, Otago Business School, University of Otago) Debbie Hopkins (Associate Professor, School of Geography and the Environment, University of Oxford) モデレーター： Joseph M. Cheer (和歌山大学国際観光学研究センター 特任教授)</p>	
12/6(日)	<p>観光教育研究セミナー2020 Vol.1「スポーツツーリズム5～メガイベントが日本社会を変える～」</p> <hr/> <p>スピーカー： 間野義之(早稲田大学スポーツ科学術院 教授) 巽 樹理(追手門学院大学社会学部 准教授) 仲伏達也(株式会社三菱総合研究所ビジネス・コンサルティング部門副部門長兼キャリア・イノベーション本部長) モデレーター： 伊藤央二(和歌山大学国際観光学研究センター センター長代理/和歌山大学観光学部 准教授)</p>	

開催日	イベント名/講師等	ポスター
1/24(日)	<p>観光・宇宙天文教育研究グループシンポジウム in 醍醐寺「観光からみた宇宙5」</p> <hr/> <p>スピーカー：          仲田順英(醍醐寺 執行・統括本部長)          磯部洋明(京都市立芸術大学 准教授/京都大学宇          宙総合学研究ユニット 特任准教授)          尾久土正己(和歌山大学観光学部 学部長/教授、          国際観光学研究センター研究員)          上之山幸代(和歌山大学大学院教育学研究科 修          士課程2年/アトリエ幸)          モデレーター：          秋山演亮(和歌山大学協働教育部門 教授/国際観          光学研究センター研究員)</p>	
3/2(火)～ 3(水)	<p>「第3回日本国際観光映像祭」</p> <hr/> <p>スピーカー：          北村潤一郎(一般財団法人 地域活性化センター)          森清顕(音羽山 清水寺 執事補)          木川剛志(日本国際観光映像祭ディレクター)          田中光敏(映画監督)          上嶋史朗(MS-NEXT代表)          船田幸夫(一般社団法人日本巡礼/日本ヘリツー          リズム協議会 設立準備委員会)          尾久土正己(和歌山大学観光学部教授)          神田孝治(立命館大学文学部教授)          本田勝之助(本田屋本店代表)          加嶋章博(摂南大学)          宮田耕輔(雑誌編集者)</p>	

# CENTER FOR TOURISM RESEARCH

【発行】和歌山大学国際観光学研究センター  
〒640-8510 和歌山市栄谷930  
電話 073-457-7025  
URL <https://www.wakayama-u.ac.jp/ctr/>

【発行日】2021年6月



Center for Tourism Research

2020年度 年次報告書  
和歌山大学 国際観光学研究センター